

中国と世界の左翼、リベラルとイスラムへの「聖戦」を唱える米国防長官

ベン・ノートン

ゲオポリチカル・レポート 2025年3月7日

<https://geopoliticaleconomy.com/2025/03/07/us-defense-secretary-hegseth-overthrow-china-crusade/>

トランプ政権のピート・ヘグセス国防長官は、みずからを「十字軍」の一員と呼び、アメリカは中国と左翼、イスラムへの「聖戦」中にあると信じている。2020年に出版した『American Crusade』（アメリカの十字軍（改革運動））と題する著書で、「共産主義の中国は崩壊するだろう」とのべ、「イスラエルとアメリカは絆をさらに緊密にし、イスラム主義と国際的な左翼運動の災禍と戦う」と誓っている。



著書には Our Fight to Stay Free（自由を守る我々の戦い）の副題がつけられ、トランプがホワイトハウスに戻り、共和党が政権を奪還すれば、「共産中国は倒れ、さらに200年間その傷をなめ続けるだろう」と宣言した。中国は「文字通り我々の世代の悪役」であり、「今、共産主義中国に立ち向かわなければ、いつの日か中国国歌を歌うことになるだろう」と警告した。中国共産党と国際左翼はイスラム主義者と共謀して、神の祝福を受けた神聖な国であるア

アメリカとイスラエルに敵対している、という陰謀論的世界観を展開。「イスラム主義者が核兵器を持つことはないだろうが、持とうとすれば700年代まで先制爆撃されるだろう」と付け加えている。

中世の十字軍を賞賛し、21世紀の西側保守派は、十字軍が千年前に始めた聖戦を続けるべきだと主張した。章のひとつには「十字軍を再び偉大に」というタイトルがつけられている。

本の最初のページで、みずからの「改革運動」を「聖戦」だとし、左翼は「単なる政治的敵対者」ではない、我々は彼等の敵なのであり、彼らと合意できるものは何もなく、我々が勝つか、彼らが勝つかだ、と述べている。

またアメリカではまもなく右派と左派の間で内戦が起こると断言。「そうだ。何らかの形で内戦が起こるだろう。誰もが望まない恐ろしいシナリオだが、回避するのは難しいだろう」「アメリカでは左派と右派の間に和解しがたい相違があり、政治的プロセスでは解決できない永遠の対立がある」と主張し、「国家の離婚」を予言した。

中国との戦争に "備える"

ヘグセスは国防長官に就任してから、中国に対して極めて攻撃的な政策を表明している。2025年3月、フォックス・ニュースで、米国は中国と戦争する「用意がある」と語った。

また1月の就任数日後、米軍に行った演説では、「我々は世界で最も強く、最も殺傷力のある軍隊であり続ける」と誓った。2月の別の演説では、「我が軍を再び地球上で最も致命的でワルな軍隊にする」と公約した。

トランプ大統領がヘグセスを知ったのは、彼が2014年から10年間フォックス・ニュースで働き、保守派のトーク番組「フォックスと友人たち」の共同司会者だったからだ。



自らを「ポピュリスト」と皮肉るヘグセスだが、その経歴はエリートそのものだ。プリンストン大学で学び、ウォール街の投資銀行ベア・スターズ（2008年の金融危機で破綻）で株式市場アナリストとして働いた。その後、世界的な政治家を養成する名門ハーバード大学ケネディスクールで修士号を取得した。

第一期のトランプ政権が始まる前は、典型的なネオコン共和党员だった。タカ派の発言をして、違法なイラク侵攻を強く支持し、米軍に志願してイラクで戦った。

キューバのグアンタナモにあるアメリカの収容所で1年間働いた。その時、ブッシュ政権下で収容者に残忍な拷問が行われていた。ヘグセスは国防長官として、不法移民をグアンタナモに強制移送するというトランプ政権の決定を擁護。収容所を訪れて、国防総省の写真撮影に応じ、この政策を持ち上げている。

過激な神権主義

ヘグセスは、米国は聖書の法に従うべきだと説く過激派キリスト教民族主義教会と密接なつながりがある。改革派福音主義教会連合（Communion of Reformed Evangelical Churches）の会員であり、この教会連合は、LGBTコミュニティは犯罪化されるべきだと考えている。同じメンバーの中には、女性の選挙権はなくすべきと主張し、奴隷制を肯定的に語る者もいる。

ヘグセス氏自身も、キリスト教過激派や白人民族主義運動に関連した多くの入れ墨をしていて、その中には「十字軍の十字架」や、ラテン語で「Deus

vult」(神の意志)と書かれたものもある。このスローガンは十字軍の時代に使われたものだ。



約 300 ページの本の半分以上が左派への攻撃に費やされている。全 14 章のうち、9 章は「左翼主義」について書かれている。社会主義や世俗主義、多文化主義、環境主義、そしていわゆる「ジェンダー主義」と「グローバリズム」について左派を攻撃している。

またイスラムを「最も危険な "イズム"」と呼んで、左派を奇妙に関連づけ、一章を費やしてイスラム教を悪者扱いしている。左翼とイスラム主義者は米国を破壊する世界的陰謀の一部であり、「共産主義の中国とその世界的野心の次に、イスラム主義は世界の自由にとって最も危険な脅威である」と書いている。

対中聖戦

この著書のなかで、中国と中国人について 110 回も言及し、「共産主義中国は我々の地政学上の最大の敵、」と糾弾し、中国人は「文字通り我々の世代の悪役だ」と書いている。

彼は、2019 年に「中国はある意味、世界にとって脅威だ」「ミッキーマウスでさえ、共産主義の中国政府とその経済エンジンが脅威であることを理解して

いるだろう」「必要であれば強制的に、企業をアメリカに連れ戻さなければならない」「中国には夢があり、それはチャイニーズ・ドリームと呼ばれるもので、かつての中華帝国の再興で終わる」と彼は主張した。

いわゆる「グローバリズム」を通じて、中国は「技術戦争、文化戦争、貿易戦争、軍事戦争」を仕掛けてしていると宣言。「今、共産主義中国に立ち向かわなければ、いつか中国国歌を歌うことになるだろう」と彼は主張した。

主張には矛盾がある。中国は強力で増大する脅威であると警告すると同時に、中国は弱く脆弱であると主張している。「中国経済は自由ではなく、窃盗、脅迫、そして中国の敵対勢力の弱さによって強力に構築されているため、偽物である」と書いている。

米国の対中貿易依存は「国家安全保障上の大問題であり、まさに緊急事態だ」と指摘、「嘘をつき、ごまかし、盗むような敵とは公平な貿易はできない」とし、中国との貿易を止めるべきだと主張している。

ヘグセスは、2020年のアメリカ選挙で民主党が勝利した場合、「左派はイスラム主義の奴隷になるまで、大きな政府で我々を奴隷化するだろう」とし、「何らかの内戦が起こるだろう」と予測した。トランプが2020年の選挙で負ければ、「共産中国が台頭し、世界を支配するだろう。ヨーロッパは正式に降伏するだろう。イスラム主義者は核兵器を手に入れ、アメリカとイスラエルを地図上から消し去ろうとするだろう。自由は衰え、専制政治が台頭するだろう」とのべていた。

トランプは結局2020年の選挙に敗れ、そのようなことは起こらなかったが、ヘグセスは、トランプと共和党が政権に復帰すれば、「我々の自由市場経済は繁栄し、中国はソビエト連邦のように不正行為も競争もできなくなるだろう」と予測している。

アメリカとイスラエルが西洋を救うために「聖戦」を繰り広げている

ヘグセスの世界観はすべて左翼と対立している。著書『アメリカの十字軍』の中で、彼は自分のイデオロギーは「アメリカニズム」と述べ、それを

「アメリカ合衆国の建国の理想に対する無条件の忠誠」と定義した。アメリカニズムは「左翼主義の対極にある」と強調した。また「アメリカニズムを定義するもうひとつの方法は、アメリカン・ナショナリズムだ」と指摘。自分自身とトランプはアメリカン・ナショナリストだと誇らしげに名乗り、アメリカは「地球上で唯一の真の自由の砦」だと主張した。

しかし同時に、彼の「アメリカニズム」は国際的でもある。彼は欧米の他の極右ナショナリズム運動を、中国、左翼、イスラムに対するグローバルな文明闘争の盟友と見なしている。「アメリカニズムは、旧ヨーロッパの左翼官僚のグローバリズム・ビジョンを拒否するポーランドのような場所で生きている」と書き、「残念なことに、われわれは現代のアメリカの民主党議員よりも、国際的な自由の戦士たちと共通点が多い」と付け加えている。

また「ベンヤミン・ネタニヤフが国際的な反ユダヤ主義やイスラム主義に果敢に立ち向かうイスラエルでは、アメリカニズムが生きている」とし、「アメリカを愛するなら、イスラエルを愛すべきだ」「イスラエルはイスラム主義者にとっても国際的な左翼にとっても敵ナンバーワンであり、それだけでイスラエルを愛する理由になる」と強調している。

ヘグセス国防長官は2025年2月、イスラエルのネタニヤフ首相と会談した。国防総省の報告書には、「長官は米国とイスラエルの間に存在する断ち切れない絆を強調し、中東における模範的な同盟国としてイスラエルを称賛した」と記されている。



2025年2月、イスラエルのネタニヤフ首相と会談するピート・ヘグセス米国防長官

『アメリカの十字軍』の中で54回もイスラエルとイスラエル人に言及、イスラエルを数回訪問したことを自慢。イスラエルの歴史を学ぶために、彼は読者にYouTubeの右翼チャンネルPragerUのビデオを見ることを勧めた。

「アメリカの十字軍である我々にとって、イスラエルはアメリカの十字軍の魂を体現している」「信仰、家族、自由、自由企業を愛するなら、イスラエル国家を愛することを学びなさい」と書いている。彼によれば、米国はイスラエルと同盟を結び、文明間の戦いを主導している。

彼はこう書いている。

端的に言って、なぜイスラエルが重要なのか、なぜイスラエルが西洋文明の物語の中心であり、アメリカがその最大の現れであるのかを理解していないなら、あなたは歴史の中に生きていないのだ。アメリカの歴史は、ユダヤ教とキリスト教の歴史、そして現代のイスラエルと切っても切れない関係にある。

私たちキリスト教徒は、ユダヤ人の友人やイスラエルにいる驚くべき軍隊とともに、無条件のアメリカニズムの剣を手に取り、自分たちを守る必要がある。私たちはイスラム主義を押し戻さなければならない。

世俗主義の邪悪な力に反撃しなければならない

ヘグセスは神権主義的なキリスト教ナショナリストである。彼は政教分離に反対し、アメリカはキリスト教国家であり、その法律は聖書に基づくべきだと深く信じている。

「世俗主義の邪悪な力に反撃しなければならない」「合衆国の建国者たちは今日の世俗主義的なアメリカに嫌悪感を抱くだろう」と指摘。「神がいなければ、アメリカはアメリカではない」「世俗主義運動はアメリカニズムとは相容れない」と主張した。

著書の1章全体が「世俗主義の教会を倒す」ことに費やされている。

トランプと共和党が政権を維持できれば、2020年には「中絶は最終的かつ永久に違法となり、政府の学校は放棄されるか、完全に変質する」と予測。学校は「アメリカの例外主義という事実に基づいた真実の物語」を広めるべきだと主張した。

ヘグセスによれば、トランプは神権主義との戦いにおいて重要な同盟者である。「トランプ大統領は、少なくとも今のところは世俗主義の潮流を食い止めている」「彼は臆することなく信仰を支持し、アメリカ社会で長く働いている世俗的な流れに反撃している」と書いている。

トランプ氏は「牧師を含むクリスチャンが政治や文化にもっと関与するよう勇気づけた。彼は十字軍を鼓舞したのだ!」と述べた。

対イスラム聖戦

ヘグセスは米国がキリスト教神権国家になることを望んでいるが、イスラム主義（神権政治運動として）だけでなく、イスラム教そのもの（宗教として）にも激しく反対している。

American Crusade の中で、ヘグセスは「イスラム主義ほど自由にとって危険な『イズム』はない」と書いている。多くのイスラム教徒はイスラム主義者ではなく、宗教としてのイスラムと政治運動としてのイスラム主義を区別して考えている。そのことを認めながらも、ヘグセスは本質的に違いはないと主張し、「普通のイスラム教徒」批判し、彼らは「イスラムの運命は世界を支配することだと信じている」と主張した。

著書の中では、「穏健な」モスクや「平和的な」イスラム教徒という言葉を用符で囲み、それらの存在を否定。「イスラム教は平和の宗教ではないし、これまでもそうだった」と断言した。

彼はこの本の中で、皮肉にも「イスラムの大群」という言葉を使い、こう書いている。

中国共産党とその世界的野心に次いで、イスラム主義は世界の自由にとって最も危険な脅威である。交渉することも、共存することも、理解することもできず、暴き、疎外し、粉碎しなければならない。12世紀にキリスト教の十字軍がイスラム教徒の大群を押し返したように、アメリカの十字軍も今日、イスラム教徒に対して同じ勇気を奮い起こす必要がある。

イスラム教への無知を示すように、ヘグセスはイラン（シーア派が多数を占める国）を、シーア派イスラム教徒を異端の多神教徒とみなし、彼らを絶滅させようとしてきた過激派サラフィー・ジハード主義グループである宿敵 ISIS やアルカイダと不合理になぞらえた。

トランプの最初の任期中、ヘグセスは Fox News に出演し、トランプにイランを爆撃するよう呼びかけたが、著書の中では、「同性愛者の権利を支持するなら、保守派に嫌がらせをするより、イラン大使館の前で抗議するだろう」と語った。同様に、フェミニストは欧米の性差別を批判するのをやめ、代わりにイラン大使館やサウジアラビア大使館の前で抗議すべきだと述べた。

ヘグセスは特にトルコを批判している。彼は、トルコが1951年にNATOに加盟したとき、「当時の外交政策の専門家たちは、トルコの加盟を認めれば、トルコ政府が西側諸国やわれわれの西側の価値観に近づくと信じていた」と指摘。「一時はうまくいったが、今日では破綻している。それどころか、中国と同様、逆のことが起きている」とのべている。

(了)

【翻訳チェック 田中靖宏】